

校長室だより

共学共高

第
69
号

令和6年6月10日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

教育実習生の授業～その2

前号に引き続き、教育実習生の授業を紹介したい。

まずは、2年3組の論理国語「メディアの変容」(土井隆義氏)である。前時の復習から始まる。M先生から生徒たちに投げかけられた問いは「教科書54ページの10行目に、『人間関係に対して敏感になった理由』とあるが、それを2つ挙げなさい」というものだ。一つは、M先生が本文を要約しながら「人間関係の自由化」を挙げる。もう一つの理由をペアで話し合う。その後、指名された生徒が「価値意識の多元化」と答える。正解だ。次々と生徒たちへの発問がなされる。「多様な生き方が積極的に認められるようになったことで、見づらくなってきたことは、何か?」「自分が選んだことに安定した根拠を見出せなくなる、とあるが、『安定した根拠』とは何か?」そのたびに、生徒たちはペアになり、話し合いをして「人生の羅針盤」「身近な他者の評価」といった解を導き出す。確かに、私は教育実習ガイダンスの際に、「生徒間の対話と表現のある授業場面」をつくってください、とお話した。しかし、実習生が絶え間なく問いを投げかけ、7回ほど対話をさせる授業は想定していなかった。よく挑戦してくれたものだ。土井氏の著作では、人間関係を重視する傾向が強まっている困難な状況の中で、若者たちはお互いにキャラを立て、それを演じ合うことで生き抜こうとしている、と主張されている。その一例として、最小限の線で描かれた単純な造形であるキャラとして、ミッフィーが挙げられている。ここでM先生からの投げかけは、「ミッフィーの絵を描いてください。」というものだ。生徒たちは、過去に絵本などで見たことがあるのだろう、的確に描いている。ただ、実際のミッフィーは私が思ったよりも目と目の間隔が広がった。M先生は「なぜ描けたのでしょうか、ペアで話し合ってください。」と投げかける。さらに、本文からその理由部分を抜き出させる。単純明瞭でデフォルメされたものであるがゆえに、周囲の人々に自らの存在を強く印象づけてくれる、のだ。予定した内容にわずかに届かなかったが、チャイムで授業終了である。退室時に生徒のYさんから「校長先生もミッフィーを描きましたか?」と聞かれる。「描いていません」と答えると、「描いてください。」と言われてしまった。頭の中では描いたのですよ。私だって、自分の子どもが小さい頃は、何度もミッフィーの絵本を読み聞かせしたのだから。



次は、3年9組の体育「バレーボール」の授業である。

チャイムと共に授業が始まるが、生徒たちの「お願いしまーす」と大きな声をそろえている。あれ、こんなに元気なクラスだったかな、と一瞬思う。I先生がホワイトボードに予め記入しておいた本時の目標である、「試合でラリーを続けよう」を全体で確認する。さらに授業の流れも確認してから、アリーナ内をランニング2周。その後、体育委員2名が前に出て、準備体操、補強運動を行う。再度整列して、I先生が最初に行う基本練習とポイントを説明する。I先生の一言に対して、3年9組のみんなが「はい」と声をそろえる。アンダーハンドパスは両腕で三角形の面をつくる、オーバーハンドパスは両掌で三角形をつくる、アンダーハンドサーブは右利きの場合、左足を前、右足を後ろにして後ろから重心移動する、ということだ。バレーボール経験者が3名いて、未経験者との技能差はあるが、楽しそうにかつ懸命にやっている。次に、4つのチームに分かれ、チーム内で1番から6番までの順番を決める。内容は、ラリー練習である。1番の人の前に、2番から6番までのチームメイトたちが弧を描いて並び、1番の人がアンダーハンドサーブをする。その際に、誰にサーブをするか直前に名前を呼んで指名する。その後、アンダーハンドパスやオーバーハンドパスを使って、1番の人にボールを返すのである、うまくいったら、ローテーションして2番の人が1番と同じ役割をする。さらに、アンダーハンドパスに続けてオーバーハンドパスをしたら、次の人が片手でスパイクのような姿勢でボールを1番の役割の人へ返すのだ。よく工夫されている、これで実戦につながっていくはずだ。この後は、ネットをはさんで2つのチームが対戦し、ラリーを続ける。どちらのチームの方がネットを超える回数が多いかを競うのである。最後に、ゲームである。不思議なことに、オーバーハンドパスからスパイクにつながる場面がいくつかのチームで出てくる。段階を追った指導の賜物だろうか。途中で作戦会議の時間も設けられ、生徒たちは勝つためにどうすればいいか、話し合っている。結局、Cチームが優勝となる。整理体操をしてから集合。生徒たちは大きな声で、「ありがとうございました！」と言う。3年9組は、こんなに明るく前向きなクラスだったのか、と思ったりもしたが、I先生との望ましい人間関係が築かれた証なのだろう。新たな発見のある授業であった。(おわり)



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）